

## 週 報

「信じます。

不信仰なわたしを、  
お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



人と神、人と人をつなぐ難しい働きをしています  
日本基督教団 西宮公会教会

〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

[koudou@gamma.ocn.ne.jp](mailto:koudou@gamma.ocn.ne.jp)

### 小さな手大きな手

(前週よりのつづき)

1人は、「建物や設備は撤去する一方、受け入れ先のない放射性物質は構内に管理・保管すべき」です。ただ、事故から15年、「建物や設備」は、事故の緊急事態が続いていますから、撤去などおよそ不可能な現場・現状です。そして、「受け入れ先のない放射性廃棄物は構内に管理・保管すべき」についてですが、ほぼ100%受け入れ先は得られませんから、「構内で管理・保管すべき」以外考えられません。そうだとすれば、これでは「廃炉最終形」とは言い難いはずです。

13人は、「当面は構内で安全に管理した上で、技術的な見通しが立ってから最終形を決めるべき」となっています。間違いなく「当面」は、事故の東電福島は現状の緊急の事故対策に追われ続けることになります。ただ、この「当面」は、既に15年経って、ほぼ何一つ見通しが立っていませんから、あんまり安心できる「当面」ではありません。あのあたりで続発している、M6～7で、震度6弱などの地震が、より東電福島に近い場所で起こった場合、「当面は構内で安全に管理」は吹っ飛んでしまうはずです。おだやかに、あわてず急がず「技術的な見通しが立ってから最終形を決めるべき」は妥当な見解ではあるのですが、環境中に放出されることになった放射性物質の毒、および事故の東電福島は、人間の技術が生み出さないし「可能」にしたはずなのですが、中でも環境中に放出され、今も放出が続く事故現場は、その人間の「技術」を阻んで、人間及びその技術たるものを無力にしないではおかないのです。

それこそが、東電福島の事故なのです。

で、考えられる『「廃炉の最終形」は?』…。

「廃炉」という限りは、何も残さない「更地」ということになるのでしょうか、事故現場の現状からは、到底それは実現できそうにありません。「廃炉」ということでは、その一歩が「始まった」と報告されるのは、炉内

で溶融している燃料等の一部を「遠隔操作で取り出した」だったりするのですが、その量は、1グラムにも満たなかったりします。溶融したとされる燃料等は、およそ800トンと推定されるうちの1グラム未満です。その取り出し、検査の為の移動もすべて遠隔操作です。それらを強いるすべてが、高濃度の放射性物質です。

東電福島の事故から、既に15年経っても、事故の原子炉からは、1日約100トンの高濃度汚染水が漏れ出しています。その処理で発生するセシウム、多核種も増え続けており、「処理不能」とされるトリチウムを含む汚染水は、海洋に放出され続けています。

「廃炉」どころではなく、高濃度の放射性物質を環境中に放出する、事故は現在も進行中なのです。

なのに、「廃炉の最終形」が「取り沙汰」されることになるのは、「事故の原子炉は制御されている」が合言葉になり、すべて「復興」に向って前進しているとしたことで、そんな物語を語らざるを得なくしているからです。

「物語」はとっても大切です。

「物語」は、繰り返される戦争の世界になっている21世紀であっても、「平和」はあり得ること、その一歩を、私たちに刻ませる力になります。広島・長崎の後であっても、生き残った人たちは、明日があることを、明日を作る歩みを刻み続けてきました。

「血と泥の水を飲んで」生きのびた沖縄の人たちが、2度とこの島が戦争になってはならない歩みを刻み続けてきました。

そうして、きざむ歩みをないがしろにしてしまう世界で、平和を語り続ける力になっているのがその「物語」なのです。

しかし、東電福島で語られる物語は、少なからず違っています。起きていることを、時には隠蔽し、時には矮小化する時、それは「物語」ではなく、単なる虚偽でしかなくなるからです。

そうして語られているのが「廃炉の最終形」である以上でも以下でもありません。